

日本精神運動と仏教思想

——衛藤即応の所説を中心に——

工 藤 英 勝

日本精神運動の歴史的位相

「日本精神」の用語は、一九三二（昭和六）年の満洲事変を契機に当時の日本社会において多用されることになった国粋主義的、国家主義的な標語である。「日本精神」の類語としては、幕末期の「尊皇攘夷」や、日露戦争期の「大和魂」「忠君愛国」等先駆とする。「日本精神」以後は、「国民精神総動員」「国家総動員」「大政翼賛」等の天皇制にもとづく軍国主義的な政治スローガンに影響を及ぼした。

さて、日本精神運動は日本軍の満洲侵略に対する国際的な非難と孤立の「非常時」下において、当時の言論界や宗教界をも巻き込んだ流行思潮となった。日本精神をアプリオリに実体化してその優秀性を鼓吹する精神運動は、必然的に外来文化やその産物である個人主義、自由主義、社会主義をも排撃するイデオロギーともなった。

ところで、この日本精神の流行思潮やその運動に対しては、

当時の知識人の間では必ずしも好意的に受け取られていたわけではない。和辻哲郎⁽²⁾、津田左右吉⁽³⁾は日本精神運動の思想的な矛盾や脆弱さを指摘し、さらに抑圧的で排外的な論調を批判している。

このような日本精神運動の流行に伴う賛否両論の中で、宗教界特に仏教界の反応は敏感なものがあつた。自らが日本精神運動に対して取る距離と位相は、その宗教、宗派の教学思想の位置づけを参照するものであり、「日本精神」の擁護論にせよ、反対論や懐疑的な意見にせよ、それが自らの教学思想の自覚の内実を間接的に表明することにつながる。

紀平正美「日本精神」論批判

ヘーゲル哲学の研究者で仏教に関する著作もある、紀平正美（一八七四〜一九四九）は、「読売新聞」宗教欄に「日本精神——特に流行性を帯びたる最近の傾向——」⁽⁴⁾と題する論説を六回に分けて発表した。

紀平は日本精神論を展開するのに、「流行性」「行の組織」「分」と「つとめ」「根本義」「美力」「清算すべきもの」の各回の表題において、何が日本精神であり、何がそうではないのかを例話も交えながら説き明かす。

紀平の論によれば、「満洲事変を機として」流行語となった「日本精神」の本質は、要するに「我が日本に於ては因り據り得る所の道即ち古今を通じて謬らす中外に施して愧らざる底の『人の道』」であり、「我と自然とを常に融合一せしめる處の日本人のみ感ずる所のもの」である。また、日本精神は、知の組織とは区別される「率直な感じを其の俛に進展せしむる行の組織」「率直なる現実性、直接態」、日本的な「分」と「つとめ」の倫理、そして「清明心」「美力」「中今」の概念で表される内実が「日本精神の根本義」なのだと述べている。また、この日本精神に反する立場としては、特に西洋文化の「個人主義」「科学的の思想」「抽象的なる理論」などの「知の組織」を対置させる。紀平は、日本精神を正しく行ずるためには、西洋の個人主義にもとづく「自覚」「権利や義務の対立」「祖国」「祖国愛」「社会主義」などの概念は清算されるべきものであり、それが日本人としての「つとめ」であると結論している。

紀平の「日本精神」論の特徴は、市川白紘がその当時述べているように「紀平、里美、松永の日本精神はヘーゲル張り、

松岡、中野のファシズムはバク臭く、日本精神の名において西欧の帝国主義を密輸入している」⁽⁵⁾のであり、これは紀平自身の「日本的ならざる思想型を以て日本精神を論ずるやうな實に苦々しき議論」の評価がそのまま当てはまる。

さて、紀平正美のこの「日本精神」論を読んでいち早く批判的見解を公けにしたのは、曹洞宗の宗学者、衛藤即応（一八八八〜一九五八）であった。衛藤は、「教学新聞」記者のインタビューに答えるというかたちで、「日本精神の歪曲」⁽⁶⁾と題する談話を三回に分けて発表した。

衛藤の紀平「日本精神」論批判のスタイルは、真正面からのイデオロギー批判ではなく、相手の所説に従うように見せて裏からその矛盾をつくという、いうなればエラスムス流のそれであった。衛藤は、その冒頭に、「吾國現下の非常時に際し、・・（中略）・・高潮され出した『日本精神』なるもの、その主義乃至これが主唱者たる人々の思想等々に對して自分の腑に落ちないところ、不満に思ふ點を多々考へさせられたからである。・・（中略）・・尤もこれは、同博士の所説を讀んで初めて思つたことでもなければ、特に博士の所説に反對するのでは勿論ないが、その云はれるところによつて不幸にして自分はハッキリした日本精神なるものを掴むことが出来なかつた」と述べ、流行思潮として登場した「日本精神」論への疑義を呈している。もつとも、衛藤は「日本精神」イ

デオロギー自体を否定しているのではない。この思潮に迎合して現れた危機的な思想状況に対して、秘かに一矢を報いんとするものである。衛藤の紀平「日本精神」論批判の要点を列挙すると、①思想的な不明瞭さ②『古事記』『日本書紀』に偏重した復古主義的態度③文化の無視④排外的思想・排他的主義⑤排仏思想・反宗教運動の前兆となることへの懸念などである。衛藤はこの論説の結論として、「然し遺憾乍らこの眞個の日本精神は、さながらの姿において究明、把握されてゐない。多くは西洋の學問で鍛へた頭、輸入の思想から、これを觀ようとしてゐる。」と述べている。この結論は先に紹介した市川白紘の「日本精神の名において西欧の帝國主義を密輸入している」や当時の良心的な教養人とも共鳴するものであり、衛藤の鋭い見識が読みとれよう。

ただし、衛藤の「日本精神の歪曲」にも問題なしとはしない。それは第一に、その表題に端的にあるように、「日本精神」自体は自明な思想として承認していること。さらに、歴代の皇室が篤く崇信してきた仏教を屈辱する過激な日本精神運動は、「吾國歴朝の皇室に對するこの上もない不敬である。」として、「不敬」を盾にして仏教の社会的立場を擁護していることである。なお、この「不敬」議論は、後には仏教界全体を國家主義や軍國主義体制に萎縮させるキーワードとなる。

衛藤「神社崇拜と仏教」

衛藤は「日本精神の歪曲」発表の1ヶ月後、更なる「日本精神運動」の批判を公けにした。一九三四（昭和九）年二月十二日に、駒澤大学仏教学会主催の卒業生送別予餞会において、「日本精神運動に直面して」の演題で公開講演会が持たれた。衛藤の講演内容は、速記録「神社崇拜と仏教」^⑦と改題されて『駒澤大学仏教学会会報』第四輯に掲載されている。衛藤は既に「自力と他力」の演題で講演する準備を進めていたが、「我國の思想界は非常に緊張し今や澎湃として日本精神運動は全國に波打つてゐるが如き状態であるに對し、．．．（中略）．．．斯る緊急の問題を黙過して教理上の項目に就いて話すに忍びない。」として、急遽、演題を変更した。衛藤は、日本精神運動の事実上の中心問題として「神社と仏教」との関係に着目して、仏教の学的または信仰的な立場からの批判的な見解を表明している。当時の衛藤は、社会思潮に對して非常に敏感に反応しており、日本精神運動批判の以前には、秋田雨雀らの反宗教運動への応答もしていた実績がある。

衛藤「神社崇拜と仏教」の趣旨は次の通りである。

衛藤は、当時の仏教信仰および仏教研究があまりにも時流に迎合している現状を慨嘆した後で、「從來の佛敎の研究は余りに時代の信仰に無頓着に歴史や教理を研究して、現代に

生命ある宗教として之を研究しなかつた結果である。本来佛教學なるものは、信仰の理論的根據を明らかにせんとしたものであるから、その教理研究は直接時代に動いてゐる實際の信仰と關係を持たなければならぬ」と述べ、学的な良心にもとづいて現実の信仰の根柢を明らかにしようとする。衛藤の日本精神運動批判もこの学的な良心から発している。先に發表した談話「日本精神の歪曲」を下敷きにしつつ、衛藤は、現今の日本精神運動の問題点を以下の九点において総括する。①古神道中心の復古主義思想であること。②排外的な氣分が顯著であること。③排仏的傾向をもつこと。④復古懐旧の退嬰主義に陥つてゐること。⑤ドイツ文化哲学を焼き直しただけの机上の日本精神論。⑥日本精神論の不統一と一面性。⑦偏狭な国粹主義に傾きやすいこと。⑧不敬・不謹慎な言辭を弄してゐること。⑨総じて思想的な鎖国主義であること等である。衛藤は、当時の穩健な教養人同様、「日本精神」の觀念や天皇への「不敬」の概念自体を批判してはいない。当時流行した日本精神運動の偏狭で排外的・排仏的な傾向を批判したのである。かかる衛藤の批判は、天皇制批判を欠落させている点で極めて不十分との誹りを受けねばなるまい。しかしながら、当時の多くの仏教者、仏教学者、宗学者が躍起になつて仏教思想と日本精神との一体・一致を高調している中では、かなり批判的な見解表明ではある。

衛藤は満洲事変以降流行しはじめた日本精神運動、紀平の日本精神論に対して、かかる異議を申し立てたのであつた。衛藤自身も日本精神の觀念を否定してゐない以上、従来の日本精神論とは異なる独自の日本精神理解を立論する必要があつた。この講演録ではこれが主題となつてくる。つまりは神社崇拜と仏教思想とをどう信仰の中で布置するののかということである。

衛藤は、比較宗教学の宗教類型論にもとづいて、「神社崇拜と仏教」の問題を論じる。彼がその論拠とするのは、民族的宗教と、世界的宗教との対比である。日本精神運動がその根柢としてゐる神道は、民族的宗教に類似した宗教（「類似」の語に微妙なニュアンスあり）で、非宣伝の民族本位の宗教である。それに対する仏教を、人間本位の世界的宗教・「包容的」「自覚の宗教」であると規定している。その結果「民族本位に立つと、人間本位に立つとは、其の基調を異にするだけに其の行き方が自ら異つてゐることを忘れてはならぬのである。神道の學者は宗教学の立場から、神道が民族的であることに満足しないで、之を普遍化して廣く人間の宗教としよ」と解釋し努力して居るやうである。即ち天照皇大神を基督教の神の如く、全世界の人類の神として之を普遍絶對の人間一般の神としよとして居るやうである。其の点を高調すると民族神としての生々した權威を弱めるものである。即ち民

族的宗教は、之を一般化すれば其の固有の民族的威力を失ふものである。」との結論に達し、神社崇拜と仏教信仰との間に明確に一線を画する。当時の国家神道の軍国主義的な性格を捨象したこの神道論には限界を感じるが、当時のファナティックな天皇一元・国家神道一元の思潮にあつては、穏健な仏教者としてはギリギリの抵抗であつた。

さて、衛藤は神社崇拜と仏教信仰とはその宗教の水準が異なつてゐるとしながら、「日本の佛教徒として神社に對する信仰は結局如何にあるべきものであらうか」と自問し、「一個の人間として内に尊き人間の價値を自覺し、又國民としては美はしき日本精神に生きることが、その生活を内外より規定して、此に完全なる日本國民として世界に其の尊嚴を誇ることが出来るのである。斯くして始めて人類の爲の日本精神の發露となり世界文化の爲の活躍となるのである。而して此の理想は今始めて私が之を唱ふるのではなくして、已に遠く本地垂迹の信仰は此の意味を現したものである。内には人間の理想としての佛陀の自覺に發し、外には日本精神の權化としての神社崇拜に依つて、權威ある國民的自覺に生きるこの内外二重の調和こそ、本地垂迹の信仰なのである。」との答えを出している。仏教を「本」「内」とし、神社崇拜を「迹」「外」とする「本地垂迹」論を展開しているが、何とも歯切れが悪い。この歯切れの悪さを、われわれはどのように捉え

たらよいのであろうか。

仏教者・仏教学者の戦争責任論からこの衛藤の論調を照射すると、明瞭な「反戦」「軍国主義反対」の論理とは言えないし、良心的な「抵抗」と称するにも躊躇を感じる。しかしながら、筆者はこの歯切れの悪い衛藤の論調に、抑圧的な国粹主義思潮に對する微かなる「サボタージュ」を感じる。このサボタージュは、結果的には「反戦」「抵抗」の論理とはならなかつたが、学的な良心のひとつの軌跡を見る。

現代を意識するということは、現代の欠点も背負い込むことでもある。その点で、この衛藤の業績は微かであるながら、その歴史的意義は大きい。

- 1 「国史大辞典」の「日本精神」項目
- 2 「続日本精神史研究」
- 3 「思想」第一四四号所収「日本精神について」
- 4 「読売新聞」一九三四年一月七日〜一三日
- 5 「日本ファシズム下の宗教」
- 6 「教学新聞」一九三四年一月二一日〜二四日
- 7 「駒澤大学仏教学会会報」第四輯附録所収
一九三四年三月二五日発行
- 8 太田久紀師による評価

（キーワード） 日本精神、衛藤即応、紀平正美、国粹主義、神社崇拜

（足利工業大学非常勤講師）